

女性研究者養成システム改革加速講演会

日 時：11月17日（月）15：00～17：30

場 所：奈良女子大学 N棟N202室

テーマ：大学・大学院で身につける能力

講 師：①川嶋 太津夫 氏（大阪大学 未来戦略機構 教授）

講演Ⅰ：「大学生のジェネリック・スキルズ ー育成と評価ー」

②山内 保典 氏（大阪大学 全学教育推進機構 講師）

講演Ⅱ：「研究者にとっての Transferable skills training」

主 催：奈良女子大学男女共同参画推進機構（女性研究者養成システム改革推進本部、キャリア開発支援本部、ファカルティ・ディベロップメント推進室）

参加者：本学教職員・ポスドク、一般（31名）

まず、本学男女共同参画推進機構 キャリア開発支援本部の竹中信之コーディネーターより、このような講演会を開いた背景の説明があった。経団連の新卒採用に関するアンケート調査によると、大学・大学院で身につける能力として、コミュニケーション能力や主体性、チャレンジ精神は重視されているが、専門性についてはあまり期待されていないという。また、7割の企業がこの5年間博士を採用していないといった事実がある。社会で求められている能力をどのようにして身につけるのかは、今の時代において考えるべきテーマである。

続いて、キャリア開発支援本部 本部長の岩渕修一教授による開会挨拶があった。大学院の定員が増えて、大学は多様になった大学院生を引き受けざるを得なくなった。グローバル社会において活躍できる人材をどう育てるのかについて手探り状態なので、参考になるお話が聞ければありがたいと述べられた。

【講演Ⅰ】

文科省「学校基本調査」によると二人に一人が大学へ行く時代となり、社会では、スーパーグローバルな知識をもった人材が求められている。しかし出口が問題でボトルネック状態にある。専門で何を学んだかということと、どういう職につくかということが必ずしも関連しなくなっている。また、3年離職率が3割以上になっている。同一企業定着率も下がっている。このような時代にあって、大学の責任は卒業時だけではない、将来のことも考えて何を教えるべきかを考えるべきである。大学教員が大学において学んでほしいこととして、専門分野の知識の修得や技能・技術を挙げるのに対し、企業は大学生に、主体性やコミュニケーション能力、実行力を求める傾向にある。学問分野固有のコンピテンスから社会人の基礎力となる汎用的なコンピテンスを育成していくことが今後の課題となる。では、汎用的なスキルとはなにか。これは特定の職業を超えて活用できる移転可能 transferable な能力といえることができる。アインシュタインによると、自分の頭で考えたり判断したりする一般的な

能力を発達させることが第一に考えるべきことであるという（メイヤー&ホームズ編「インシュタイン150の言葉より」）。また、大学教育で重要なジェネティックスキルを考えるとき、清家慶應義塾塾長による「学問による貢献」が参考になろう。つまり、自分の頭で考える能力（系統立てて物事を考える能力）を高めることであり、具体的には問題を見つけ、その問題がなぜ起きているかの理由について考え、その考えが正しいかどうかを確かめ、結論を導くということである。そのためには、まず過去の学問の蓄積を学ぶ教養教育の充実が大切で、先人たちが自分の頭で考えてきた軌跡を追体験することである。そして、それぞれのテーマを見つけ、そのテーマについてのオリジナルな仮説を作り、それを実験、統計分析、文献調査などの科学的方法で検証して結論を導くということである。一人の教員が授業で与える影響は小さいので、大学において組織的・体系的取組が必要となる。専門教育や一般教育の中でジェネリックスキル（GS）を教えるが、カリキュラムの中でいつ、どう教えるのかというカリキュラムマッピングが必要となる。また、教員の視点と学生の視点が異なるため、どのように学生を評価するのかをより具体的に示すことが必要となる。川嶋氏は、大学教育で最も重要なGSとして、「学習力」が最も移転可能なスキルである、学ぶ方法を学ばせることが必要だと述べ、アルビン・トフラーの言葉「明日の文盲とは、読むことのできない人ではないだろう。それは学ぶ方法を学んだことのない人のことであろう」で締めくくられた。

【講演Ⅱ】

Transferable skills (TS) とは、身に着けたことが他の状況で有効に活用できるようなスキルである。TS と学術研究活動との相関関係はきわめて補完的で、コースワークを通してプレゼン能力やコミュニケーションスキルを身につけるということである。学生が飛び込む社会が不確実な社会に変わってきた。このような社会では、常に新しい事態への対応が必要となる。長期的な判断と短期的な判断が求められている。科学技術の進歩もこれらに拍車をかけている。個人の研究が主であったリトル・サイエンスから、大規模な研究施設や多額の経費を要するビッグ・サイエンスを経て、よりグローバルなメガ・サイエンスの時代となっている。学際的研究も増え、他分野の専門家との協力関係をつくることが大事になってきた。また、SHEE サイエンス（安全、健康、環境、倫理）が発展し、これまでのサイエンスだけでは立ちいかなくなってきた。このようなサイエンスを視野にいたしたスキルが大切である。

現代では、博士課程修了生は半数しか正規の職員になれていない。従って、多様なキャリアパスを模索することが必要となる。大学教育の役割として、大学教育の特殊性を生かし、学びの内容と共に学びの方法を学ぶこと、物的・人的環境を通じて学ぶことが挙げられる。具体的な取組例として、山内氏は大阪大学の例を挙げ、多様な研究科の20人程度を対象に行った「競争」と「協創」を踏まえた学ぶ集団の形成と活動について語られた。そこでは、言葉で自分を表現すること、図やイメージで自分を表現すること、既存の枠組みで自分を表現すること、自分の専門を表現すること、キャリアプランを描くことを通じて、自分がもっているTSと自分もつべきTSについて考え、自立的な学習の基礎を築いていく訓練を行う。

英国にはこういった教育のネットワーク組織が存在し、高等教育機関や研究者に、自己啓発、専門的能力の開発、キャリア開発に関する情報提供やアドバイスを行っているという。最後に、日本の関西にある各大学がどのような教育を行っていくか、その制度設計が必要な時代であることを強調された。

【総合討論】

教職員からさまざまな意見が出た。「教養教育とは答えのない問題について考える授業だ」「思考の枠組みがひとつではないことを知り、自分の思考の弱点や別の思考パターンを知ることが大切にすべき」「大学のどの段階でTSが必要であることを認識させるのが効果的か考える必要がある」など活発な意見が出て、研修会の予定時間を超過するほどとなった。

最後に大学院人間文化研究科FD委員会委員長の出田和久教授より閉会の挨拶があり、大学教育はどうあるべきかについて考えるよい機会となったことが述べられた。

参加者のアンケートでは、「普段の視点とは少し違った視点から教育についての見方、考え方についてのお話を聞かせて頂いて、また参加者の方々の意見を聞かせて頂いて、少し、自分の視野が広がった気がする。大きな波が迫ってきているのを感じて本学もよく考えて改革に取り組まなければならないと思う」「社会の見る目がよく分かった。事例を示していただいて助かった」「大学教育における問題点や、研究者にとって重要な能力を論じていて、目を広げることができた」「新しい言葉（概念）・考え方をインプットされ、とても勉強になり、満足した」「今の時代の若者と社会の要望のはざまでの憂いが見える今を考える機会となった」「大学教育と、その後社会人として活躍していくためのスキルは別物ではないと感じることができた」などの意見が寄せられた。

